

「作家」という幻想

ジッドに憧れたロラン・バルト

滝沢 明子

はじめに

バルトにはジッドを扱った書物はなく、ジッドについて書かれた論考も非常に少ない。しかし、ジッドはバルトの「理想の作家」であり続けた。とりわけ青春期にジッドを敬愛していたことを、1970年代半ば頃から、バルト自身がいろいろなところで語っている。バルトがジッドについて意図的に、積極的に言及するようになったのは、バルトが自身について語り始めた時期にあたる。批評家としてほとんど論じることのなかったこの作家について、バルトが個人的な親愛の情を表現したことは、当時驚きをもって受け止められた。一体バルトはジッドをどのようにみていたのか、ジッドがいかなる重要性をもっていたのかについて、検討してみることとしたい。

1. 理想の作家ジッド

原スープ

1975年の『彼自身によるロラン・バルト』のなかで、思春期にジッドがいかに重要な存在であったかが語られている。そこでバルトは「ジッドは私の原初の言語であり、私の原スープ¹、文学のスープなのだ²」と述べている。それ以前には、バルトはジッドの影響についてあまり語ってこなかったため、この一節は少なからぬ反響をよんだ。同じく1975年に行われたインタビューでは、バルトがジッドへの偏愛を表明したことが話題となり、「あなたは『彼自身によるロラン・バルト』のなかで、ジッドがあなたの「原スープ」、 「原初の文学スープ」であると話していますね」という問いかけがなされている。それに対するバルトの応答は、次の通りである。

¹ 強調は原文。「原スープ (Ursuppe)」は、ドイツ語で生命の源となるマグマを意味する。

² Roland Barthes *par Roland Barthes*, 1975, t. IV, p. 677. 以下、バルトからの引用は *Œuvres complètes*, Seuil, 2002 により、初出年を付記したうえで巻、頁をしめす。

ジッドについて、もはや十分に語られなくなってしまっています。さて、私が若かった頃、ジッドは私にとって重要でした。おそらくそのせいで、他のものは霞んでしまいました。そうして、私はジッドとの数多くの文学的なコンタクトを持ったにもかかわらず、シュルレアリスムとの接触は果たさなかったのです。つねに私は、ジッドに親近感を持ち続けていました³。

バルトが若かった頃、ジッドの文学的、社会的評価はその頂点にあった。だが、バルトがジッドについて語り始めた1975年には、ジッドはもはや時代遅れの作家とみなされており、したがってバルトの発言はいささか奇異なものにうつったのである。そのうえ、自分について、または自分の過去について語ることは、文学的な素朴さとしてうつりかねない時代であった。よって、バルトはジッドについて語るにあたって、それを正当化しなくてはならなかったのだ。

1977年に行われた対談でも、『彼自身によるロラン・バルト』の、ジッドについての同じ一節が話題となる。バルトは、いかにジッドが青春時代において重要な役割を果たしたのかを再び説明する。会話は、以下のように展開している。

——たとえばジッドですが、彼はあなたにどのような影響を与えたのでしょうか？ あなたの本のなかに、「ジッドは私の原初の言語であり、私の原スープ、私の文学のスープである」と書かれてはいないでしょうか？

——はい、自分のことについて語っていましたから、その本のなかでそのように言いました。もちろん、私の青年時代について誰も知り得ない、ということも考慮したのです。私は青年期にジッドをたくさん読みましたし、ジッドは私にとってとても重要でした⁴。

このバルトの説明には、どこか弁明するようなニュアンスが感じられる。ジッドについて話したのは、作家としての興味からではなく、自身の過去の一部であったからだ、とだけ言いたげである。ジッドは、バルトが自身について語るときにだけ言及を許されているかのようだ。『彼自身によるロラン・バルト』で、突然ジッドについて語ったことが、いかに突飛にうつったかがわかる。

³ « Vingt mots-clés pour Roland Barthes », 1975, t. IV, p. 869.

⁴ « La dernière des solitudes », 1977, t. V, p. 420.

実は、バルトのもっとも初期に書かれたテキストのうちの一つは、ジッドにかんするものであった。1942年の、「アンドレ・ジッドとその《日記》についての覚書⁵」である。このテキストでは、バルトはジッドへの賛美の念を率直に表現している。1942年当時、ジッドは存命であり、5年後にノーベル賞を授与されることになる存在だ。その時代には、ジッドに魅せられ、彼について語るじゅうぶんな理由があったのである。バルトが実質的なキャリアを開始するのは、1953年の『零度のエクリチュール』を待たねばならない。その年は、ジッドが没して2年後であった。バルトが批評家として世に出て、現代文学や演劇についての議論に加わるようになった時代は、ジッドが徐々に時代遅れになってゆく1950年から1960年代であった。つまり、バルトにはジッドについて何らかの批評や分析を行う機会も理由もなかったのである。それゆえ、自身の青年期の読書体験を語るときまで、バルトにとってジッドが問題となることはなかったのだ。1975年に、ジッドが自分の「原スープ」であると宣言したことは、驚かれて当然だったのである。自身の過去を語り、そしてジッドを語ることは、二重に「流行遅れ」にうつる行為であり、ある意味では挑発的な試みでもある。「自伝」を新たななかたちで試みたバルトが、ジッドの魅力をもまた蘇らせようとした、といえるかもしれない。

書きたいという欲望

青年期の読書についてバルトが語る言葉から、ジッドがバルトの文学体験においてどのような存在であったかがみえてくる。ジッドは、若きバルトのうちに、書きたいという想いを呼び覚ましたのだ。1975年に行われた別のインタビューでは、バルトはジッドが「書く欲望」を与えたのだと述べる。そして、「どういった瞬間に、書かねばならないと悟ったのでしょうか？」という質問にたいして、「私はとても早い時期に、書きたいと思い始めました。思春期にはたくさん読書をしましたが、とりわけジッドを読んでいて、書きたいという欲望をおぼえました⁶」と答えている。ジッドに憧れ、理想の作家とみなし、さらには自身を投影し同一化する。そうして、バルトはジッドの人物そのものに関心を持つようになるのである。バルトが「つねにジッドへの親近感を持ち続けていた」と語るとき、ジッドの作品だけではなく、ジッドの作家像、人物像がバルトにとって大きな意味をもっているのだ。

⁵ « Notes sur André Gide et son « Journal » », 1942, t. I, pp. 33-46.

⁶ « Entretien avec Jaques Chancel », 1975, t. IV, p. 901.

さて、ジッドとバルトの間には、親近感がうまれるにたる共通点があった。そのことが、1977年の対談のなかで話題となっている。「ジッドと面識があったのですか」と聞かれ、否定したのちにバルトは次のように述べている。

——いちど、私は彼をととても遠くから、ブラスリー「リュテシア」で見かけたことがあります。梨を食べて、本を読んでいました。彼と面識はなかったのです。でも、当時のたくさんの若者たちにとってそうだったように、私が彼に関心をもつ材料はいくらでもあったのです。

——たとえば？

——彼はプロテスタントでした。彼はピアノをひきました。彼は欲望について語りました。彼は書いていました⁷。

ジッドを読み、青年バルトは書きたいという欲望をおぼえた。そしてそのとき、ジッドのような作家になるという「幻想（ファンタズム）」が生まれたのである。こうしてバルトは、作家のフィギュール、そしてジッドの人物そのものに関心を持ち始める。ジッドの作品にだけではなく、あるいはそれよりもむしろ、バルトはジッドの作家としての在り方に魅力を感じていた。だから、バルトは『日記』以外のジッドの作品をほとんど論じていないのである。ジッドは、その作品によってではなく、その作家としての在り方によって、バルトに影響を及ぼしたのだ。理想の作家としてジッドに憧れたことが、書き手としてのバルトの根源にある。その意味で、ジッドはバルトにとって重要な作家なのである。

理想の作家

さて、『彼自身によるロラン・バルト』のなかでジッドへの言及がなされるのは、まさにこのような「理想の作家」の文脈においてである。この書物には、ジッドにかんする断章が三つ含まれているが、そのどれもが理想の作家について語っているのだ。まず、「深淵（Abgrund）」と題された、先に取りあげた「ジッドは私の原初の言語であり、私の原スープであり、私の文学のスープなのだ」という一節がみとめられる断章をとりあげてみよう。その断章の前半部分には、次のようなことが書かれている。

⁷ « À quoi sert un intellectuel ? », 1977, t. V, p. 366.

自己を他者とみなすことなく、書き始めることなどできるのだろうか——あるいは、少なくとも昔はできたのだろうか？ 作品の源泉の歴史を、フィギュールの歴史で置き換えるべきだろう。作品の起源とは、最初にうけた影響にあるのではなく、最初にとったポーズにあるのだ。ひとは役割を模倣し、そののちに換喩によって芸術を模倣するのだ。私は、なりたい存在を再創造することによって、創造を開始する。この最初の願望（私は願ひ、身を捧げる）は、幻想の秘密のシステムをつくりだす。そして、しばしば願望の対象である作家の著作とは無関係に、それは時代を超えて持続する⁸。

ここからジッドが「原スープ」であるという話が導かれるのだから、ここで語られる「模倣」や「願望」の対象となった作家はジッドに他ならないだろう。一般論を語っているようでありながら、バルトはこの箇所ですりげなく「私」という主語を使っている⁹。バルト自身がジッドという「なりたい存在」を「再創造」することで「書き始め」たことが強調されていると考えられる。同じ断章の後半では、ジッドと自身の関係がより詳しく語られ、その最後に「原スープ」発言がなされることとなる。

彼の最初期の論文のうちの一つ（1942年）は、ジッドの『日記』についてのものであった。別の論文（「ギリシャにて」、1944年）の文体は、明らかに『地の糧』の模倣だった。ジッドは、彼の青春時代の読書のなかで大きな位置を占めていた。彼には対角線上にあるアルザス地方とガスコーニュ地方の血が混ざっていて、ジッドにはノルマンディー地方とラングドック地方の血が混ざっていた。プロテスタントで、「文芸」の趣味をもちピアノを弾くとなると、その他のものを考慮せずとも、彼がこの作家のうちに自分を認め、欲さないことなどありえようか？ ジッドの深淵、ジッドにおいて不変のものは、私の頭のなかでなおも頑固にひしめいている。ジッドは私の原初の言語であり、私の原スープであり、私の文学のスープである¹⁰。

先に引用した箇所とあわせて読むことで、バルトが「最初にとったポーズ」が、ジッドのそれであることが明白となる。バルトは作家ジッドを模倣することで、さらにいえばジッドに自己投影することで、自らの作家としてのキャリアをスタートしたのである。バルトのエクリチュールの起源は、ジッドだということになる。

⁸ *Roland Barthes par Roland Barthes*, t. IV, p. 677.

⁹ 『彼自身によるロラン・バルト』では、「ロラン・バルト」を指すにあたって「私」「君」「彼」などいろいろな人称が用いられている。

¹⁰ *Roland Barthes par Roland Barthes*, t. IV, p. 677. 引用文中の強調は原文。

作家になるという幻想

さて、バルトによれば、憧れの作家になりたいという「幻想の秘密のシステム」は、「願望の対象である作家の著作とは無関係に」持続するという。バルトにおいて、作家になりたい、ジッドになりたいという欲望は、ジッドの著作と結びつくとは限らなかったということになる。バルトがジッドその人と比べて、その作品にあまり関心を示さないのは、こうした事情にもよる。『日記』はジッドの人物をうつすものなのでバルトの興味をひくが、それ以外の著作についてバルトはほとんど語らない。たしかに批評家として、バルトはジッドの作品をほとんど論じなかったが、その存在が小さいものだったことは決してなかったのだ。「幻想」は持続したのであり、それゆえ 1970年代になって再びバルトはジッドについて語り出すのである。その「幻想」は、ジッドの人物像を構成する要素をもとに、ふくらんでゆくのだ。

『彼自身によるロラン・バルト』でも、先に引用した 1977 年の対談のなかでも、バルトはジッドとの共通点をあげている。プロテスタントであること、ピアノを弾くこと、欲望、などである。もちろん、欲望という言葉の裏には、ジッドとバルトが共有しているホモセクシュアルな欲望が示唆されている。それらの要素が、ジッドへの関心をそそる。だからこそバルトは「彼がこの作家のうちに自分を認め、欲さないことなどありえようか？」と述べるのである。共通点があるからこそ、ジッドへの同一化が容易になり、ジッドになりたいという願望がつのるのだから。作家になるという「幻想」のなかで、ジッドはバルトにとって理想となり、モデルとなるのである。

ここで、『彼自身によるロラン・バルト』で、ジッドについて語られている二つ目の断章をみてみたい。まさに、「幻想としての作家」と題されたその断章で、バルトは思春期に抱いた作家になりたいという願望について語っている。

おそらく、もはや「自分は作家だ！」という幻想を抱いている若者など一人としないだろう。作品ではなく、実践を、姿勢を、ポケットに手帳を、頭のなかには文章を入れて世界を動き回るやり方について、同時代のどの作家を模倣したいと思うだろうか？（ロシアからコンゴまで周遊中、食堂車で料理を待つあいだ、手帳にメモをとりながら古典作家を読んでいるジッドを、私はそんな気持ちで眺めていたのだ。1939 年のある日、ブラッスリー・リュテシアの奥で、梨を食べながら読書していたジッドを、そんな気持ちで実際に見たのだ。）というのも、幻想が抱かせるのは、日記のなかに見いだすことができ

るような作家の姿であり、作品を差し引いた作家なのである。それは聖なるものの至高の形態であり、欠如、空虚なのである¹¹。

間接的な表現がとられているが、ここでバルトの青春時代が述懐されていることは明らかである。先に引用した 1977 年の対談のなかでも「ブラッスリー・リュテシア」で梨を食べているジッドを見かけたことが語られているので、その出来事がバルトに深い印象を与えたことがわかる。「自分は作家だ！」という幻想を抱き、ジッドを模倣したいと願ったのは、まさにバルト自身だったのである。

2. ジッド的「日記」の問題

休暇中の作家

ここで、『現代社会の神話』のなかの、「休暇中の作家」という章を思い出したい。その冒頭は、「コンゴに分け入りながら、ジッドはボシュエを読んでいた」という文章で始まっている。バルトが「休暇中の作家」を語るさいにジッドを例に出しているのは、偶然ではないだろう。この書物では、ブルジョワ的な見方にもとづく作家像の脱神話化が問題となっているので、ジッドについての分析がこれ以上展開されることはない。しかしこの一節からは、作家の日常の姿、すなわち生の細部とでもいべきものへのバルトの関心、そしてジッドがそこで象徴的な存在としてあらわれてくるということがみてとれる。

すなわち、実は 1957 年の『現代社会の神話』において、バルトはすでに作家の日常の姿への関心をみせているのである。青年時代に垣間見たジッドの日常の姿は、バルトにとってフェティッシュ的なイメージというべきものとなった。そこから、作家の日常にたいする嗜好が形成されたと考えられるだろう。

しかし、ここで一つの疑問が生じる。「休暇中の作家」は、「コンゴに分け入りながらボシュエを読むジッド」といった写真を、ブルジョワ思想を体現するものとして批判し、脱神話化するものではなかったか、というものである。この、一見矛盾しているようにみえる状況は、作家の日常をうつした写真について、ブルジョワ社会とバルトが別の受け取り方をしているところからきている。ジッドの写真を例に出して、バルトは「作家をよりいっそう

¹¹ *Ibid.*, pp. 655-666. 引用文中の強調は原文。

従属させるために、よき社会がうみだす狡猾な神話化¹²」を批判する。つまり、バルトの批判は、作家を従属させんがための「神話化」のみに向けられており、むしろ「作家の日常の姿」をブルジョワ思想の汚染から守ろうとする意図があるのだ。バルトの作家の「生」へのこだわりは、以下の文章からみてとれる。

おそらく、私のような単なる読者にとって、才能によって選ばれし種族の日常生活を内密に共有することは、感動的でありかつ誇らしいことであるだろう。ある作家が青いパジャマを着ているのだ、ある若い小説家が「きれいな女の子、ルブロンチーズとラベンダーの蜂蜜」を好むことを新聞で知るとき、私はおそらくその人間味にたいして愉快的親愛の情を感じるだろう¹³。

アイロニカルな調子でブルジョワ的なものの見方を批判した文章であるが、少なくともバルトが作家の日常の細部に並々ならぬこだわりをもっていることがわかる。そうした細部が、「梨を食べながら読書するジッド」といったようなフェティッシュ的なイメージを構成しうるのだ。つまりバルトは、「コンゴに分け入りながらボシュエを読むジッド」のイメージを、ブルジョワ思想を強化するために濫用することを拒否したのである。そうしたイメージは、作家への親愛の情をもたらす日常の姿として愛でられるべきなのだ。

作家の日常生活

バルトにとって、作家の日常を共有することは、それ自体としてはまったくネガティブなことではない。天才にも日常生活がある、といったようなまやかしの論法で神話を演出することが、唾棄すべきブルジョワの態度なのだ。脱神話化の作業によって、作家の日常の姿を無垢なイメージのままに取り戻すことが目指される。「天賦の才」や「天職」といった言葉で、作為的に作家を神話化し、その姿を「ショーウィンドウに飾る」やり方に異議を唱えているのである。バルトは作家の生の細部に「親近感」を覚えることを欲しているのであって、作家の「超人性」に驚嘆したいのではないのだ。そうした意図のもと、バルトは「休暇中の作家」のイメージを、ブルジョワ神話的なものから、愛すべきフェティッシュ的なイメージへと転換させたのである。

ここで『彼自身によるロラン・バルト』に立ち戻るならば、作家の生の細部への関心が同じかたちで持続していることに気づく。「好きなもの、嫌い

¹² *Mythologies*, 1957, t. I, p. 693.

¹³ *Ibid.*, p. 695.

なもの」という断章で、バルトは自分の好みを列挙している。たとえば好きなものとして、「サラダ、シナモン、チーズ、とうがらし、アーモンドペースト」が挙げられている。「休暇中の作家」で、作家の日常を構成する要素として「ルブロンチーズ」の他に、「辛口白ワインと超レアのビフテキ」といった食べ物の名前が出てきていたことを思い出すにはおれない。そのうえ同じ断章で、バルトは好きなものとして「梨」と「ピアノ」もまた挙げている。梨はブラスリー・リュテシアでのジッドの姿と結びついており、またピアノはバルトとジッドの共通点だ。青春時代に憧れの作家の日常の姿を好んだことが、のちの作家となった自分自身の日常の細部を語ることにつながっているのである。

日記を書く権利

さて、ジッドを「原スープ」とし、彼を模倣しながら書き手となったバルトだが、その事実は、バルトがジッドに似た作家となったことを意味するのだろうか。青春기에抱いた「作家であるという幻想」は、現実のものとなったのだろうか。この問いの答えをさぐるべく、『彼自身によるバルト』のなかで、ジッドについて語られる三つめの断章を検討したい。ジッドについて書かれた断章として先に扱った二つの断章である、「深淵」と「幻想としての作家」は、どちらも青春時代におけるジッドの重要性を語ったものだった。しかし三つめの断章はジッドの『日記』を扱ったもので、「断章から日記へ」と題されている。その冒頭は、次のようなものである。

小論文形式を解体するという口実のもと、ついには定期的に断章形式を実践するに至る。そして断章から、「日記」に移行する¹⁴。

もちろん『彼自身によるロラン・バルト』は、断章形式で書かれている。その他にもバルトは多くの書物を断章形式で書いており、とくにこの時期には断章形式についてさまざまな思考をめぐらせている。バルトは実際に、断章から「日記」への移行を考えていたのだろうか。断章の先にある「日記」を思い描くさい、ジッドの『日記』が念頭にあることが、以下のように続く文章からわかる。

その時から、これらすべての目的は「日記」を書く権利を得ることになるのではなかるうか？ 今まで書いたものすべては、いつか、自由にジッドの『日記』

¹⁴ Roland Barthes par Roland Barthes, t. IV, p. 672.

というテーマを再登場させるための、執拗かつひそかな努力なのだとみなす根拠が私にはあるのではないか¹⁵？

バルトの「日記」があるとしたら、それはジツ的なものでしかありえない。思春期に抱いた幻想に忠実なまま、バルトはジツのような作家になりたいと願うのである。バルトによって書かれたすべてのテキストは、ジツのようになるために書かれたといえる。その先に、「日記」を書く権利が得られるのである。

なぜ「日記」なのか？ バルトはジツの『日記』にたいして、他のどの作品にたいするよりも大きな関心をよせている。なぜなら、『日記』は作家個人の生を直接的にうつすものだからである。それを読むことで、バルトはジツの生を共有するのである。おそらくバルトにとって、作家であることと「日記」を書くことは結びついているのだ。誰でも日記をつけることは可能なことから、「日記を書く権利」など、本来は問題にならないはずである。バルトのいう「日記を書く権利」とは、「作家の日記」を書くこと、「ジツ的な日記」を書くことにたいする権利なのである。つまり、日記を書くことができるということは、ジツのような作家になれたということ意味するのだ。だからこそ、その権利の獲得が夢想されるのである。したがって、「断章から日記へ」を締めくくるにあたり、バルトは「最終的な地平には、おそらくごく単純に、最初のテキスト（彼の一番初めのテキストは、ジツの『日記』を対象にしていた）がある¹⁶」と述べるのだ。この「最初のテキスト」が書かれたとき、バルトは27歳だった。当時、バルトはサナトリウムで療養生活を送っており、「サナトリウムの学生」という雑誌に、「アンドレ・ジツとその「日記」についての覚書」が発表されたのである。

さて、ジツの『日記』に再び向き合い、「日記を書く権利」について自問自答したバルトであるが、それに続けて悲観的な考察を述べるのである。

しかしながら今日、（自伝的な）「日記」の価値は失墜している。行き違いのようなものだ。ひとが嫌悪感をもつことなく「日記」を書き始めた16世紀には、それは「日記（*diaire*）」すなわち「下痢（*diarrhée*）」と粘性分泌物（*glaire*）」と呼ばれていたのである¹⁷。

¹⁵ *Ibid.*

¹⁶ *Ibid.*

¹⁷ *Ibid.*

日記が昔のように世間に受け入れられ読まれなくなったため、バルトは日記を書くことにたいして抵抗を感じているようである。そして、その断章の最後のパラグラフでは、ナルシズムへの嫌悪感が語られるのである。

自分の断章をうみだすこと。自分の断章をじっと見つめること（修正、彫琢など）。自分の廃物をじっと見つめること（ナルシズム¹⁸）。

「断章から日記へ」と題された断章であるから、この箇所は断章から日記への移行が問題になっていると解釈できる。「自分の廃物」という表現は、16世紀に日記をさす言葉が含まれていた「下痢」と「粘性分泌物」とに対応するであろう。すなわちバルトは、「日記」が自身からうみだされる廃物であると考え、それを弄る行為にナルシズムをみとめるのだ。ジッドの『日記』にたいするあこがれを表明し、自分にも「日記」が書けるかもしれないという可能性を示唆しているにもかかわらず、バルトは日記の実践について否定的な態度をとる。もはや日記が流行らないこと、そして日記につきまとうナルシズムに耐えられないことから、バルトは最終的に「日記」を書くことを諦めているようである。それはすなわち、ジッドのような作家になることを諦めることでもある。幻想（ファンタスム）を現実とする試みは、ここでは失敗に終わるのだ。

おわりに

『彼自身によるロラン・バルト』においては、ジッドおよびその『日記』にたいするこれ以上の考察は展開されない。「日記」を書く権利を得て、ジッドのような作家になるのか、あるいはそれを完全に諦めるのか。その問題はバルトのうちに残り、1979年の「省察」という論考において、あらためて「日記」の問題が正面から論じられることとなる。しかし、「省察」は複雑かつ謎めいたテキストであり、一読しても「日記」をめぐる問題がそこで決着をみているのかどうか分からない。この「省察」については稿をあらためて論じることとしたい。ひとまず本稿では、バルトがジッドに抱き続けた共感、そして憧憬の念が、作家としてのバルトの「姿勢」を根底で規定していたことを強調し、結論としたい。

¹⁸ *Ibid.*